



うたそら

第
6
号

2022
January
1

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	04
テーマ詠欄 「暮らし」	26
一首評 「そらよみ」	34
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	36
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	38
次回予告・編集後記	39

うたそら 第6号

発行：2022.01.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

次号予告 うたそら⁷

連作欄 8首の連作自由詠

テーマ詠欄 「淡」

一首評「そらよみ」

短歌リレーコラム「望遠鏡」

リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、
詳しくはうたそらの
ご案内ページを
ご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>



第7号 ^{〆切} 2/28(月) 24時

- 8首の連作自由詠 • テーマ詠「淡」1首

第8号 ^{〆切} 4/30(土) 24時

- 8首の連作自由詠 • テーマ詠「新」1首

編集後記

新年あけましておめでとうございます。本年も「うたそら」を何卒よろしくお願ひいたします。皆さまにとってこの一年が、実りの多いあわせな一年となりますようになります！

さて、このたびは年の瀬の忙しい折、短歌誌「うたそら」第6号へのご寄稿をいただきまして、ありがとうございます。ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第6号の参加歌人さまは83名、連作欄には61名、テーマ詠には69名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「暮らし」。身近なモチーフを詠み込んだものから、暮らすということそのものまで、さまざまな「暮らし」の短歌が集まりました。また、今回はページが余ってしまったため、急遽、一読で情景が浮かんだ雨虎さんの短歌をテーマ詠からお借りして、まちがいさがしのページを作りました。ちょっとした息抜きに遊んでいただけすると嬉しいです。

短歌なりレーコラムでバトンを引き継いでくださったのは有村桔梗さん、リレーエッセイは潤れ井戸さんが書いてくださいました。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えのある「うたそら」をお届けすることができました。どうぞゆっくりお楽しみください。

また、「うたそら」では Twitter での呟きもお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は2月末〆切の3月初旬発行、テーマ詠のお題は「淡」です。早春が淡く香り始める季節、たくさんのすてきな作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ



歩歩	有村桔梗	@chattenoire_k	涸れ井戸	@kareido1111
五十子尚夏	河岸景都	@subjperf	@kate_kawagishi	@kikutitg
池田竜男	菊池洋勝	@Hitler57	久助	@nTbIBm64shltap
石川順一	北村美晴	@yunosuketanaka	くろだたけし	@tkuro2016
宇祖田都子	佐藤水魚	@shinnsyutu2020	汐射ハルカ	@sattohio_tanka
麻倉ゆく	大坪命樹	@Ejishimada	紫苑	@haru_c17h17cl2n
麻数	@ponko_san	@hs welt	詩季	@purple_aster
アダムス理恵	@Adams_tanka	@umpherhemp	西鎮	@4kitankaa55
阿部蓮南	@renalt815	@AsakuraYue	雀來	@jacksbeans2
天野うやぬ	@uzume_no_hijiri	@OotsuboMeiju	由石夜花	@xi_zhen_jvUT
雨虎俊實	小椋杏	@kakomiyano	セイ	@yohana_no_sekai
がね	高平あい	@ogura_anne	たえなかや	@petitchante
多香子	@amicus08	@hitoritsukimiru	たえなかや	@suzusuzu2009



6

リーエッセイ

いちらん

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

五十年

涸れ井戸

テーマ

書き手

三年前だったか。青空文庫関連のニュースで、著作権の期限が作者の死後五十年から七十年になつたというのを見た。

本にも寿命つてあるのかな?と考えた。作者が死んでから、五十年は生き延びる。ほんでも2018年に、新薬が開発されて七十歳まで長生きするようになった、というイメージ。自分が今年五十歳なので、シンパシーみたいな感情が湧く。

角田光代さんに「旅する本」という短編作品がある。新潮文庫『さがしもの』に収録されて

しまじろう 成人になり歴史には残らなくとも超人気もの

涸れ井戸



若いころは漫画家になりたかった。そしてプランを立てた。二十代で、全国統一して、三十代で中国やアジアを席捲。四十代で世界市場を制覇。五十代でぼつくり逝くという人生計画である。たぶん、太閤記に影響されてたんだと思う。いろいろことを学生時代、方々に触れ回った。全国制覇というのは、ジャンプとかサンデーに連載を勝ち得て、ドラゴンボール並みに売れまくることを意図してた。世界進出のために、大学卒業早々結婚してた文芸サークルの先輩の息子・正くん(当時三歳)に家庭教師として付き、英才教育をほどこし、四ヶ国語喋れるようにして秘書として雇うという遠大なプランも立てた。

若いころは漫画家になりたかった。ちまじろーう。いつの間にか学生時代、方々に触れ回った。全国制覇というのは、ジャンプとかサンデーに連載を勝ち得て、ドラゴンボール並みに売れまくることを意図してた。世界進出のために、大学卒業早々結婚してた文芸サークルの先輩の息子・正くん(当時三歳)に家庭教師として付き、英才教育をほどこし、四ヶ国語喋れるようにして秘書として雇うという遠大なプランも立てた。それで、合ってた。結局鍋を御馳走になつて、双方をして帰つた。それ以来、先輩の家には一度も行ってない。

そして自分はうどん屋、金具屋、金型屋、漫画喫茶、ラーメン屋などを転々とし、今は介護の仕事をしている。ぼつくり逝つてないし、一冊も本は出していない。正くんはその後すぐすくと成長して関西の私立大学にストレートで入り、射撃部に入部したそう。それが四年前に聞いた話。そして今は:何の仕事をしてるんだろう?今度、電話で聞いてみよう。

三年前だったか。青空文庫関連のニュースで、著作権の期限が作者の死後五十年から七十年になつたというのを見た。

本にも寿命つてあるのかな?と考えた。作者が死んでから、五十年は生き延びる。ほんでも2018年に、新薬が開発されて七十歳まで長生きするようになった、というイメージ。自分が今年五十歳なので、シンパシーみたいな感情が湧く。

角田光代さんに「旅する本」という短編作品がある。新潮文庫『さがしもの』に収録されて

若いころは漫画家になりたかった。ちまじろーう。いつの間にか学生時代、方々に触れ回った。全国制覇というのは、ジャンプとかサンデーに連載を勝ち得て、ドラゴンボール並みに売れまくることを意図してた。世界進出のために、大学卒業早々結婚してた文芸サークルの先輩の息子・正くん(当時三歳)に家庭教師として付き、英才教育をほどこし、四ヶ国語喋れるようにして秘書として雇うという遠大なプランも立てた。それで、合ってた。結局鍋を御馳走になつて、双方をして帰つた。それ以来、先輩の家には一度も行ってない。

そして自分はうどん屋、金具屋、金型屋、漫画喫茶、ラーメン屋などを転々とし、今は介護の仕事をしている。ぼつくり逝つてないし、一冊も本は出していない。正くんはその後すぐすくと成長して関西の私立大学にストレートで入り、射撃部に入部したそう。それが四年前に聞いた話。そして今は:何の仕事をしてるんだろう?今度、電話で聞いてみよう。

雛河麦

@may_spica_358

薄荷。

@aie0himeco

野歌りん

@Noutalynn

ネコノカナエ

@nekonomokanae_utu

西村曜

@nsnakira

西淳子

@Jacky244Ray

薄荷。

@symphonycogito

濱松哲朗

@k_hayatsuki

早月くい

@may_spica_358

高橋 良

@takahashi_ry5

探偵のホラー

@L_L_lawliet

千原 一

@kohagi_tw

chari

@greenchari2

寺阪誠記

@teratanka

堂那灼風

@shakufur

じゆく夕夏

@croissant Hey_Z

中村成志

@nakam8

西淳子

@Jacky244Ray

西村曜

@nsnakira

ネコノカナエ

@nekonomokanae_utu

野歌りん

@Noutalynn

薄荷。

@aie0himeco

六浦筆の助

@Tohakumutun5057

六廻めれう

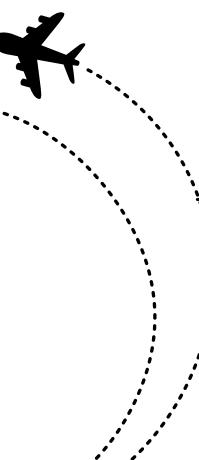
@mereumumai

村田一広

@mucciz2022

杜崎ひづる

@kousei_tsurun



83名

たくさんのご参加
ありがとうございます!

率直！
小男鹿は、こちらに住所まで詠まれているよう徳島のお菓子。「好物」とまで詠まれているのでどんなお菓子なのかとても興味を引かれました。

書名の『水晶橋』は大阪にある橋で谷川さんも大阪にお住まいのですが、ご実家が徳島ということで、むかしから食べていた馴染みのお菓子であり、いろんな思い出と結びついているやがて無を纏ふあなたのまほつきと疊りと山田屋まんじゅうと

萩原裕幸「熟田津尔」
ペんぎんぱんつの紙 27枚目 温泉

くるみからくるみ出でくる当たり前それがうれしい加賀の白峰 谷じやこ バッテラ35号

秘めごとを蓄えながらつつがなく ねえ、きよ うまでの萩の月たち 小泉夜雨 バッテラ35号

くるみやこさんが発行している短歌で遊ぶフリーペーパー・バッテラの35号「全国銘菓銘品ハンター」(2021年7月発行)から二首。

加賀の白峰は、金沢のお菓子。ググつてみると、くるみ型の皮に煮たくるみが入つていてようですか。わいい。今度金沢に行つたら買いたいです。「当たり前」の予定調和というか、くるみの形にくるみが入つているところの安定のうれしさを思いました。

そして、萩の月は仙台のお菓子。全国各地に似たお菓子はたくさんあるけれど、なんとなく本家は特別な感じがしますね。「秘めごとを蓄えながらつつがなく」歩んでゆく日々。「秘めごと」という言い方がかわいらしくて魅力的に感じます。

いつ食べようかと思つていてるうちに賞味期限を迎えてしまった萩の月。「ねえ」という呼びかけからどこか萩の月とはその「秘めごと」を設定にほどよく効いていました。

田丸まひるさんとしんくわさんの「べんぎんぱんつの紙」27枚目の温泉(2017年2月発行)回に参加された荻原さんの連作から。

山田屋まんじゅうは愛媛松山のおまんじゅう。すこし前にたまたま某所で売っているのを見かけて、この歌を思い出しました。

同紙の田丸さんの連作にも登場していて、ちょっと(かなり)ドキドキの「山田屋まんじゅう」。温泉まんじゅうというアイテムが、作中の設定にほどよく効いていました。

田丸まひるさんとしんくわさんの「べんぎんぱんつの紙」27枚目の温泉(2017年2月発行)回に参加された荻原さんの連作から。

山田屋まんじゅうは愛媛松山のおまんじゅう。すこし前にたまたま某所で売っているのを見かけて、この歌を思い出しました。

同紙の田丸さんの連作にも登場していて、ちょっと(かなり)ドキドキの「山田屋まんじゅう」。温泉まんじゅうといふアイテムが、作中の設定にほどよく効いていました。

さいごに番外で拙作から二首(完全なる文字

くるみからくるみ出でくる当たり前それがうれしい加賀の白峰 谷じやこ バッテラ35号

秘めごとを蓄えながらつつがなく ねえ、きよ うまでの萩の月たち 小泉夜雨 バッテラ35号

くるみやこさんが発行している短歌で遊ぶフリーペーパー・バッテラの35号「全国銘菓銘品ハンター」(2021年7月発行)から二首。

加賀の白峰は、金沢のお菓子。ググつてみると、くるみ型の皮に煮たくるみが入つていてようですか。わいい。今度金沢に行つたら買いたいです。「当たり前」の予定調和というか、くるみの形にくるみが入つているところの安定のうれしさを思いました。

そして、萩の月は仙台のお菓子。全国各地に似たお菓子はたくさんあるけれど、なんとなく本家は特別な感じがしますね。「秘めごとを蓄えながらつつがなく」歩んでゆく日々。「秘めごと」という言い方がかわいらしくて魅力的に感じます。

いつ食べようかと思つていてるうちに賞味期限を迎えてしまった萩の月。「ねえ」という呼びかけからどこか萩の月とはその「秘めごと」を共有している感じがしてよいです。

ああ、そういえばまだ、クルミッ子で詠んでないなあ…



金色のピン

阿部蓮南

徒歩一分

天野うづめ

正常な位置に私は戻りたい昨夜の夢を忘れるくらいに

君が先に死んだとしても名古屋には住んでるだろう 名鉄に乗る鮮明に移ろつていく冬の空また行けなかつた公園がある

週末はライトアップを見に行こう夜の薬はあとから飲もう白菜が一玉九十八円と報告したい君の目を見て

バス停が徒歩で二分の場所にありときどき駅まで向かうため乗る工程が複雑なほど廃れゆく温泉卵はレンジでつくるちょうどいい気温がなくて薄着でも厚着でもない服を着ていく

崩れかけたバウムクーヘンの模様を戻してきれいなことなんてない「純粹な空氣」が存在しなくてもいい張り詰めていなければいいサニタリーボックスの外それだつて人の内面触れたら痛い幸せになるには桜の木を揺らせつてことですか?それはリストキー ロックならかつこいい ジャズならおしゃれ 私の音楽はなんだろうカメラマンになると涙は甘くなる 春が来るはじめまして甘雨創作をシェルターにして天井のLEDも温かくなれ 正直になるほど君が謎になる金色のピン交換しよう

七月遠鏡*

6



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは：

書き手 有村桔梗

テーマ 銘菓の名歌

先日、久々に文フリ参加のために東京へ出かけてきました(日帰り)。本当に久々過ぎて、いろいろ感覚が鈍つていいへんな旅でした。

それはさておき、旅行といえばお土産。甘いものが好きなので、自分だけのためにお土産を買いますし、各地のお菓子にときめきます。

そんなわけで、短歌の題材としてわたしもよく詠みますが、他の方たちが詠まれたお菓子もついつい気になつたり。

今回はそんな歌について、いくつか書いてみようと思います。

海までのゆるい坂道おりてゆく銘菓ひよこの顔つきをして
秋月祐一『迷子のかピバフ』風媒社
銘菓ひよこ。正確な表記としては「ひよ子」かな。東京と福岡どちらにもありますね。
比喻で、実際のお菓子として登場している訳ではありませんが、すこし上向いたかたちのひよこに、焼印で押されるつぶらな目。「海までのゆるい坂道」をおりるとにはわたしもそんな顔をしていそうな気がします。

八ツ橋が真空パックされていて明るく元気なあなたに会いたい 伊藤紹『満ちる腕』
おなじく京都のお菓子・八ツ橋。おみやげの定番ですね。真空パックなので、生八ツ橋っぽい。上の句と下の句の繋がりはそれほど明確ではないですが、「明るく元気なあなたに会いたい」という主体のあざやかな気持ちも真空パックされているような印象を受けました。

徳島市二軒屋町の富士屋には蒸菓子小男鹿われの好物 谷川紀子『水晶橋』KADOKAWA

アストロノウツ

雨虎俊寛

冬のHD Tongue of Winter

五十子尚夏

シドニーの午後2時の空ですとアナウンス流れ南十字座
見つけたらしあわせというカノープス水平線を探しにゆこう
寒空のバスターミナル 路線図に星座をなぞるようにふたりは
ほんのあとすこし伸ばせば届く手をアステリズムの線でつなげる
冬だけど僕がアルタイルきみはヴェガこのままバスは火星に向かえ
バラ園か小麦畑か砂漠、星 たとえ不時着だつたとしても
瞬きを忘れるくらい次々と流星群のようですきみが
雪のない空から雪が降るように冴える星々ふたりに積もる

バトン

有村桔梗

夢八夜

池田竜男

メリーメリー ツリーに星をひからせて人間たちは夜にかしづく
やすやすと夜空は雪に覆はれてひかりの致死量はどれくらゐ
さみしさを見据ゑる」ときミッフィーのまなぶたのなきつぶらなまなこ
琥珀糖ひとつ与へて浮かびくる冬の愁ひを黙らせてゐる
生きてゐるひとの輪郭はどうばうとしてゆくやうに降りつづく雪
真夜中の雪をうつしてしづかなる鏡の向かうに触れるゆびさき
これからなにかはじまりさうな空の下わたくしたちは地球のことじも
寒空に右手を伸ばす 来年のわたしにバトンを手渡すやうに

みずいろの傘は左右に傾いてしばらくかたい流しの蛇口
帆柱にくぐられたいと先の世で不義に染まつたカカオが苦い
花というみずからめくるものあると稚魚は近づき蓮の音聞く
聞きなれない鳥のさえぎりまねてるとカラスにやけて小銭を落とす
奪われて歌わなかつた歌を子は炎にくべて燃える白鳥
熊を追い村に戻つた頭領は子どもの足あとじつと眺める
小さくてぐらぐらゆれる歯の上で大きい歯がもうゆれていない
くちびるにゼリーのチューイブくつつけてだれかがきたと立つているじじも

祖母の笹だんご 積み上げられて一気に青が濃くなる五月
春野あくび うたの日 2015年5月6日『だんご』

阿闍梨餅は京都のお菓子。以前友人にもらつてから大好きで、先日は衝動的に通販で取り寄せたりしました。

誰かのおみやげの分配といった光景ですが、野田さんがおそらく関西圏にお住まいのことであります。旅の記念というよりは、「春先の職員室」ということで異動のための挨拶菓子的な意味合いもあるのかなどと思つたり(それとも、帰省してた人のおみやげという読み方が濃厚?)。

笹だんごは新潟のお菓子。売つてもいますが、各家庭でも作つたりします。旬は、五月六月のあたりでしようか。

この作中主体の「祖母」もご自分で作られるのでしようね。目の前で作つているところなんか、遠くに住んでいる祖母が送つてきてくれたものなのか。

みずみずしく緑うつくしい笹の葉に包まれている笹だんご。「青が濃くなる」は五月の新緑のうつくしさと呼応しているようでもあります。

八ツ橋が真空パックされていて明るく元気なあなたに会いたい 伊藤紹『満ちる腕』

「公園の中」

石川順一

初雪

泳二

藤と松巨木であるが斜め向き小石踏む音を無効化して居る
ひよどりの必死の鳴き声木々に有り美しき藻を見に行く私
猫走る竹垣の中病葉が黄緑色に膨らんで居る

公園にユダヤ人は居ない朝の雪溶けるの早くトースト食べる
食べ終えるミックスナツツ尉鶴翡翠に会える公園は良し
おせち来る今日は嬉しい大晦日悪評にドロップキックしてくれる人欲し
断弦は怖くは無くて公園の地上絵何時の間にやら消えて
頂上はもう直ぐなのに猫逃げる小高き丘の四阿降りる

この町は 僕が生まれる前だつた 冬のたび雪に埋もれていたのは
動物のような僕らが目を覚ます真っ白な二の腕の噛み跡
夜のうちに降つたのだろう冬空はびーんと張つたフィルムみたいに
足跡が黒く浮き出るアスファルトまだだれもこの町を知らない

真っ直ぐに北に進めば山があり君に似た少女が住んでいる
また降つてきたね僕らが灰色の空に向かってのぼるみたいだ
ドローンが雪の中へと落ちていく歓声に似た音を残して

君はまた寝ているだろう この町はたぶんもうすぐ 雪に埋もれる
わたしたちかさぶただよね象よりも鼻も尻尾も短いけれど

屋上猿部 VI

宇祖田都子

暗幕を張り巡らせた屋上に五年に一度くる回顧展

ワイヤレスイヤホンくらいの猿がいて耳へ入つてくる夢をみた
屋上に月の砂漠が鳴り止まず駱駝は西へ西へと進む

函という漢字にバクとルビを振る船乗りだつた講師の TATTOO
バクという名前もいいけどピロティーという名前でもいいよね多分
先輩と猿と私を乗せたまま今を漂つてゐる屋上

ピロティーに敷き詰められたピアニカを踏まずに歩くヒトコブラクダ
わたしたちかさぶただよね象よりも鼻も尻尾も短いけれど

かげろふのごと入管に死せるをみな 「た
べたいです」とふ文を遺しき

紫苑

「かげろふ」の語に表される女性の人生に寄り添う手
の無かつたことが詠みあげられ、読み手はいたたま
れなくなります。静かな絶望を空きつけられます。
生きることは食べること、食べることは生きること。
それが叶わなかつた人生、そこに至るプロセスへの
切実な悲しみが歌に横たわります。何が詠まれてい
るのか見当がつかない自分ではいたくないでしすし
社会に刺さつていく歌の存在は大切にされねば
しよう。

姉さんはチヨコ、妹はバニラ、わたしは
絶対に髪を切らないつもり

雀來豆

韻律における破調と意味上の飛躍、その両者を大胆
かつ軽やかに成すアクロバティックの妙。「わたし
は絶対に髪を切らないつもり」という下句は、(意味
の上では)ともするとウエットに傾きそなところ
だが、一首が散文的に帰結することでかえつて強
い詩情を生み出している。「チヨコ」、「バニラ」と
いうことばの選択による抑制の効いたノスタルジー
と、姉、妹との対比から浮かび上がる「わたし」の
魂の絶対的孤独。

かげろふのごと入管に死せるをみな 「た
べたいです」とふ文を遺しき

紫苑

テーマは「食」なのに、「たべたい」というひらがな
表記。出入国在留管理局にいた非漢字圏の女性のこ
とだとわかる。「かげろふ(蜂蟻)」と言えば、吉野
弘の詩「I was born」。「或曰 これが蟻の雌だと
いつて拡大鏡で見せてくれた。説明によると 口は
全く退化して食物を摂るに適しない。胃の脣を開い
ても 入っているのは空氣ばかり。」彼女も胃の中に
は何もなく、残せたものは訴えの手紙だけだったの
だろう。

一首評

詩季

一首評

五十子尚夏

ニル・アドミラリ

えんどうけいこ

「ん」を避けていれば終わりになることのないしりとりのように働く
さみしいと死ぬ動物に擬態してコートも脱がずココアを啜る
おいしそうに見える角度を探すうちおいしくなっていくグラタン

感情が動かないよう緩衝材としてのみこむ台湾カステラ

言わないで悔やんだことは一度もない ミッフィーちゃんはいつも正しい

手で合図すれば痛いと伝わって歯科医院では素直になれる

明け方に冷めてしまった湯たんぽを抱いて誰かをまだ信じたい

まだ鶴に変えられていない折り紙の数を数えることが希望だ



一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

人間のこころの在り処ドーナツでいえば
おそらく穴のところに
西村曜

同じ豚だったのだろう同じ日に期限の切
れる肩ロース二枚
御糸さち

穴までうましドーナツ！シャーロット・カタクリの
名言をつい口にしたくなるほど好きな一首。「人間の
こころはどこにあるのか？」という問い合わせの答え、も
うこれでいいんじゃないか、いや、これがいいんじゃない
か！と思ってしまった。「人間のこころ」も「ドー
ナツの穴」も存在しなくて存在するものでもないな。
それでいて、どちらも欠かせないものもあるしな
あ。これからドーナツを食べるときは穴まで残さず
味わおうと思いました。

ねがひとはなにを下地に思ふべき例へば
葉を打つ雨の滴か

汐射 ハルカ

不思議な歌である。願いを「思う」ことの下地。そ
の例として葉っぱに当たる雨の滴が挙がる。その行
動の平静さは、このような静けさを要求するのかも
しれない。雨の音は、騒音を隠し雑念を鎮めるよう
な気がする。だから、ぽつぽつ葉を叩く音を聞きそ
の滴を見て、歌人は願いを「思う」のだろう。これ
は雨の滴に限らないのかもしれない。人それぞれの
下地を見付ければ、誰しも願いを「思う」ことがで
きるのではないか。

「珈琲のはじめかた」つて雑誌を貰う帰
路で、ああ、もうはじまっている
西村曜

一読して強く共感した歌である。私も珈琲は大好き
な質なのだが、そういうことではない。新しい事象
に興味が湧きそこに向かって行くときの、少しの不
安と心地よさがないまぜになつた、抗えないような
心象が詠われているという点で、である。好奇心の
一形態と言つてもいい。三句の六音以外定形に收め
ながらも、句点を二つ配置し、効果的な引っかかり
も生まれているリズムも、歌意にリンクした美しさ
がある。

成長痛みたいなものと言わなくて良かつ
た柘榴はおのずから割れ
和田晴美

成長痛は一般に子供が明確な原因無く感じる下肢への
痛みだが、成長が理由ではなくストレス等が深く
関わるという。この歌の前半は「成長に伴う苦痛な
のだから我慢しなきや」と軽々しく口にしなかつた
自分に胸を撫で下ろしているのか。むしろ成長の果
てに割けて沢山の果実を晒す柘榴の、ある種の無惨
さ。その美しくもグロテスクな光景に、腰が引けて
いるようにも読める。第四句の句割れは、成長と痛
みを表しているのだろうか。

大坪命樹

季節の積み嵩

大坪命樹

暮らしのチャンス

小崎ひろ子

桜花妻の氣鬱のこころぎは優しき色にて撫で慰めよ

受話器ごし弱々しげなる祖母の声幼き日々を露けく偲ぶ
歳と云ふ障害には勝てるものかな 部屋に歓喜の曲流せども
ウヰスキーカつてともにぞ泣き笑ふきみに焦がれし青き味なり

古りぬれど晩夏に生きるきみとわれ八日目蟬のごとく燃えんか
人もなほ命にかへて歌ふやは 蟬の声こそ真言なるかな

むなしきに妻剥くグレープフルーツを齧る果汁の爽やかな活き
いつまでもこどものこちちにて祝ふ 母の傘寿に手作り書籍

黒光り

大橋春人

冬のサボテン

がね

洗濯のできぬ素材のカーディガン砧のやうに掌で打つ

ハンドウォッシュと洗顔料を塗り洗ふ人の皮脂により汚れた襟を
冬の色としてシクラメンあざやかに薔薇色でも桃色でもないピンク
たぶん5℃の冷蔵室の流れ作業で詰められたお節が届く
れんこんは先が見えるとかつまらない話ばかり思ひ出す休日
かまぼこを切つてならべて里芋をむいて暮らしといふは陽だまり
お仕事のための試験に「まだ」「もう」があぐねながらもするエンントリー
あらたしき年の始めは何しやう空白の待つ明日の清しさ

季節の積み嵩

大坪命樹

暮らしのチャンス

小崎ひろ子

年末といえば年末進行の 赤字の店をまだ潰れない

店長の同期は辞める岡山の（山奥らしい）実家に帰る
退屈な火曜の午後に警察に監視カメラの有無を訊かれて
制服は威圧してくる前科などないはずなのに手が胸にある
警察の腰のカバーの奥にある黒光りするもの、なんだろう
ただ朝の交通事故の映像を探していたりあの警官は

もう僕は森に帰ります冬眠に備えてチヨコを買っていきます
この店は長男ふたりと一人つ子ひとりで七時までやつてます

真夜中を縁取るような瞳から逃れられない師走の駅舎
寒空に置き去りにされたメビウスに嫌いの反対語をそつと訊く
唯一の方法として沈黙をシェアする西日に染まつた部屋で
浸け置けば置くほど味が染み込むと教えてくれた人の鶏肉
生き延びてしまえるらしい月一で湿らせればいい冬のサボテン
せめてめちゃくちやに涙が流れればいいのに6時半には起きる
アルバムの哲人と隣の哲人とを見比べている哲人の彼女
家具ひとつひとつにきみが染み付いて部屋のすべてが葉になつた



Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

//tanka/

きみらしくていいんだけれどパンの耳ついたまんまの胡瓜のサンド 雨虎俊寛

こんなにも坂多いのか代々木から参宮橋へテクテク歩く
ゲーデルのマップは毎度誤認するSOSのDM送る
看板を何で付けない?とつおいつ集まつてくるディレッタントは
詩と俳句・小説・短歌一同に会し懇親会の始まり
挨拶に応じる人と応じない人あからさまに分ける人も
詩の人と歓談をする鞄から自作を出されジャケ買いをする
即席のゲーム始まり酔つたからではなく真剣に面白い
二次会へわらわら進む肩つき合いながら坂道も楽しい

河岸景都

国境を

学校で覚えた読みを忘れては遠ざかっていく、海の向こうの
地球儀にこの指先で触れるとき小さな神を産んでしまった
遠くから私の国へ降りてきて消えてしまった天使の言葉
国境を静かに越えていくように飲み干していく異国の緑茶
英字だけ並んだ菓子の裏側にそっと佇む市内の工場
深夜まで惰性でついたテレビジョン、辿り着けない土地の人々
あなたとの間にそつと横たわる国境よりも難しい線
新聞の一面飾る問題はメルカトルだけ知らない歪み

臓器提供意思表示カードへとつけるマルより役に立てない
(殴れば、死ぬ)ステゴサウルスの脳味噌はぐくみのサイズだったたうだね
雪の降る国の言葉で「寒いね」は「あなたとはもう終わりです」の意
春が来るまでに恨みは捨てること深爪にせず爪は切ること
起きたなら寝ないと駄目だ人間は脳のすべてを使いきれない
食う前のみかんをやわく揉みしだく手に拾われる骨になりたい
そこまで、のそこがthereでもbottomでも笑う準備をしていてほしい
「寒いね」に「こっちへ来い」と返されて(たぶん)死ぬまで生きると思う

君村類

春は遠くに

介護度が上がり施設に居る暮しそれらすべてを抱いて眠らう
国の白書には載らない暮し方それらすべてを抱いて眠らう
暮しを守るエッセンシャルワーカーそれらすべてを抱いて眠らう
暮しの手帳の表紙の絵の匂ひそれらすべてを抱いて眠らう
暮し振りを気遣ふ友の文の束それらすべてを抱いて眠らう
障害児抱締む不条理な暮しそれらすべてを抱いて眠らう
暮起きする一晩あれば足る暮しそれらすべてを抱いて眠らう
病棟の主と揶揄され暮す日日それらすべてを抱いて眠らう

看板を何で付けない?とつおいつ集まつてくるディレッタントは

ゲーデルのマップは毎度誤認するSOSのDM送る
看板を何で付けない?とつおいつ集まつてくるディレッタントは
詩と俳句・小説・短歌一同に会し懇親会の始まり

「暮らし」

テーマ詠

生きるのがどうしても下手 楽天のポイントをまたもらひそこねて

不便さの波状攻撃 満天の星の襲撃 田舎で暮らす

◆ 御糸さち

◆ 深影コトハ

白菜をサクサクサク切り分けて一人で暮らす冬を楽しむ

◆ 衣未

◆ 宮岡蓮子

◆ 深山睦美

「ていねいな暮らし」を実現するために金が要るのさ週6勤務
俄には信じ難いがハロウインで渋谷に来る人にも暮らしあり

新しい暮らしに馴染むまで帰路に買うとりどりのシュークリームを

◆ 虫武一俊

朝起きてトイレに行つて食事する 介護で気付く暮らしの基本

◆ 六浦筆の助

静かなる On your mark 明け方にあなたとふたり目覚めるような

◆ 杜崎ひらく

人々の暮らしを思うバスの中誰もが揺られ明日へと向かう

◆ ゆやゆき

少しづつ減らす暮らしをする母がいつも荷物に差すポチ袋

◆ ゆりこ

わたくしはひびわれやすしワンルームにはクツジョンのあふれてゐたり

◆ 龍翔

「閉店」の 張り紙を見て立ち尽くす 每日お昼に食べてたラーメン

◆ Redvelvetcake

朝起きて朝起きるために働いて朝起きるために寝に入る 死んでいる

◆ 渡邊知博



さよならネバーランド

久助

北風

佐藤水魚

子を生まぬ女性はがんになり易いと母に言はれて検診へ行く

問診を待ちをる間ホテル付き検査プランを熟読しをり

仰向けば診察室は暗くなりピーターパンの壁紙光る

縦横に乳房伸されて魂は面白さうにそれを見てゐる

ウェンディみたいになれない 貝型の裁縫セットはあげてしまつた

魂をハンドバッグに入れたまゝした顔でサラダを食べる

ブツラータチーズを崩す刃の上で検査結果を報告しをり

わたくしの体はわたしが守るからと言へり さよならネバーランドよ

白夜

くうだたけし

七色星

汐射ハルカ

白夜にて夜を弔うビュッフェにはサンドイッチが平等にある

目覚ましのベルはこの先鳴りません夢と眠りは並走しない

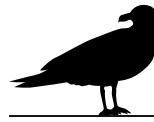
眠らずにいたはずなのに音の無い夢が映画のように流れ
瞬きのあいまを抜けて飛ぶ蝶をつまんで食べる君の指先

背の高い花から道を尋ねられ「わたしは組み木のパズルのピース」

氣を抜くとあらぬところに顔があり落ちた硬貨が希望に見える

いくらでもサンドイッチはあるけれど枕を使うことはもうない
山盛りのポップコーンは甘すぎてポップコーンは山盛りのまま

陸奥のしのぶもぢずり海峡こえて畳を染めにし馬鈴薯の花



マシンのうた

詩季

串焼きの鯖

雀來豆

発酵を急いではだめ秘密裡に記憶押し込む冷蔵庫奥

あの人気が選ぶ車はいつも白どか雪降つてもつまらない白
ラジオから流れる匿名わたくしが隠したわたしを隠せずにいる

袖と袖ボタンを掛けて環を作る絡まないとは傷めないこと

レギュラーを降りたシャツたち寄り添つた君も休もう赤いアイロン

真夜中に扇風機つけてくれる手にありがとうまでそよいでしまう
大鍋の煮物の方が美味しいと騙されている少しの手間感

かざされた手に渡す熱ストーブは対峙して添う理由を聞かず

メタルジグ

西鎮

裸のままのワイヤハンガーひつかけた窓ぎわに立ち朝日を仰ぐ
食パンにとろけるチーズのつけてよ、蕩けることは融けきらぬこと
フロントグラス乾きすぎるとワイパーがちょっと鳴くのは僕もおんなじ
ローバッテリーの携帯抱いて右胸はあの日のままの薄っぺらさで
自販機が三つならんでつめたまゝを誰もが抱えたまま冬をゆく
蜜柑ひとつ剥きながら待つ真昼間のあなたはいつもひとりを嫌う
歯ブラシのゆつくりひらく夜にいて暮らしてあともどりができるない
海の匂い纏うことすらできぬままルアーケースに眠るメタルジグ

紅月の魔女

白石 夜花

さあおいで 孤独に嘆く少年よ魔女と悪魔の晩餐会へ
理性など此処では無意味 捨てなさい 本能のまま喰らえればいいの
苦しみも痛みも全て チカラへと変えてあげるわ 愛の魔術で
どうかしら? 間に堕ちていく 気分は甘美な声で鳴いてみせてよ
これでもうアナタも悪魔漆黒の翼広げて飛び立ちましょう
紅い月見守る場所で 契約を結んで二人永久を刻もう
アナタなら魔王にだつてなれるはずだつて誰より美しいから
ワタシたちだつたらできるなんだつて 創りましようよ 理想世界を

「子供連れ可」のレストラン食べログに妻のスマホが探る真昼間

◆ 寺阪誠記

たまごたまご四つもわれてしまひけり暮らしにひそむちさき絶望

リビングの所どころに落ちる灯のこれは食べてても良い夢の部位

「ただいま」とドアを開ければ静寂が子犬のように飛びついてくる

らんざつな暮らしの果てに掃除機で服の埃を吸つて着ていく

今日もまた明日と暮らしを繋ぐため雑穀入りのご飯を炊いて

明日の朝食べるおいしいパンを買うそんな速度で暮らしています

歩けますなんとかやつてる大丈夫 回覧板が知らせるものは

年暮るもほこりの部屋に座せしままひとり暮らしはどん兵衛の息

しまかぜが吹きひのとりが飛ぶまちで空を向く子のまなこまぶしい

わたしたち愛と平和が足りなくて真顔で食べる酢漬けオリーブ

毎日がコンペイトウの万華鏡きれい、たのしい光が揺れる

マイナスをゼロに戻して日が暮れてまたマイナスにしてる日々

◆ まさけ

同棲し知つた互いのあれこれをジェンガみたいに慎重に積む

大晦日父が囲炉裏の火を熾すぼくらと鯖が焙られてゆく
弟がいちばん最後にやつて来て眠くないし疲れていないの歌を歌つた

仏間に大百足来てかすかなる土の匂いす午後のうすやみ
デリバリーマン46自転車で夜の裂け目を飛び越えてゆく

祖父がいる囲炉裏の写真 そのとき鮭は頭から食べたの?
すこしだけ黙つていろと叱られて噛みしめている五分の孤独

真ん中の兄が囲炉裏の火で焙るうつつくしいノルウエーの牝鮭
ピザ頼む? 僕はいや(なれるなら牛より自転車になりたい)私は頼も一つと

「暮らし」

テーマ詠

朝なのに夕暮れみたいこの部屋はみのむしは棲むもうはや四年

◆ 汐射ハルカ

ひたひたと国をおほへる憂きふしに年の暮れる「共助」あれこれ

◆ 紫苑

ふるさとに納税をするふるさとが国がわたしが優しくなるよう

◆ 詩季

ジャムの蓋をするりとあけるひとと住む暮らしの底によこたはる鳥

◆ 西鎮

俺俺とだけしか言わぬ人だけど騙しているのはいつも私だ

◆ 雀來豆

昼下がり一人お庭でティータイム 気分はまるで英國貴族

◆ 白石夜花

就活もホームシックもやけ酒も見守つてきたタンスを捨てる

◆ せいや

麵するふたり いつかは遠のいてゆくんだろうな、お水ください

◆ たえなかすず

かぐや姫もし現代に暮らしたら月の迎えはUFOかしら

◆ 高橋良

改めて東京事変を聴きながらわが浪費癖をかへりみかなしむ

◆ 多香子

あなたとの夜はこんなに変わったわ 先に寝落ちた貴方を見つめる

◆ 探偵とホットケーキ

十五日飾つて捨てるために買うしめ縄飾りをさみしく選ぶ

◆ 千原こはぎ

「換気せよ」「黙浴せよ」の貼り紙にイエスも風呂で笑い給うや

◆ chari

攻撃に曝され息も絶えだえのGoogleに訊く夜の献立

◆ 月硝子

メンヘラブ

たえなかすず

山形宮城往復日常

高橋良

モンスターエネルギー一氣 ときめきを殺しゆくにはまだ早すぎる
ときどきは電話ください力作の書き置きだけじや物足りないから
地獄から来ているような顔をして遊歩道の猫に口笛
車窓から見える人びと 今生の別れに軽く手を振り返す
オムライスみたいにたまに食べられる私でいいよ、駅で待ってる。
渋谷駅もう雪まじり でもあなたの光り輝く側のひとだね
優しいかどうかで言えば誰ひとり愛さぬ優しい恋人でした
長文のLINEする馬鹿泣いた馬鹿ともにゾンビになり朽ちるまで

椿の季節

多香子

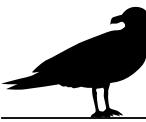
冬の底

千原こはぎ

うす紅の椿はわたしの頬の色あなたの電話が来ればほころぶ
その角を右に曲がれば海が見え、坂の下から君が手を振る
うす紅の衣まとおう恋の夜一番やさしい私をみせたい
やきもちを妬いて横向く窓の外ただ真っ白な冬が広がる
ゴシックの活字みたいに固い人 わかれの駅でふりかえらぬ人
雪の夜に貴方と食べるたらちりの柚子のきいてる出汁あたたかく
後ろから私の背中を押している「勇気」という名の羽根もつあなた
自転車のきみの背中を目で追つて坂の上には満開の椿

話し合うことなく消えたひとの名をまだ見せつける予測変換
「離れたりしない」は守られないことば 初めからそれだけは知つてた
信じるつてなんなんだろうざくざくと迷わないよう白菜を切る
離れないひとは追わない ほんとうに好きだったから嫌いになろう
どんな日もかならず暗い夜はきてひたすら朝を待つ冬の底
まだそばにいるひとたちもたぶんまたあなたみたいに消えるのだろう
「だいすき」のことばがこわい聞くたびに嫌われる未來ばかりが見える
冬晴れにひとりで生きていくことを決めてここはしんと澄む湖^{うみ}





休職の診断書ひとつLINEする職場へ友へ妻へ娘へ
耳鳴りは放水ブザーの音に似て決壊しないように 瞳る
弱いから？意地悪たから？薔薇の棘 サンテグジュペリの答えがして
何ひとつ成さずに終わる日々たちに抗いて書くToDoリスト
行き止まり往路が帰路に変わるとき焦つて迷路に陥りやすく
本当に大事なものは過ぎてから光るシステム止めてください
真っ白な5.5キロの犬を抱きただ抱きつづけ終わる日曜
長月は自ら命を絶つ者が溢れる蟬や向日葵や 駅

少しずつ民俗学にのめり込む記紀が隠した神を求めて
棄てられた神の御靈を啜りつつ廃社に咲き満ちる花手水
揺れやまぬトカラに思う今もなお国産み担う神の存在
掘り進む未知の地層の底深くぐんぐん伸びてゆく縄文期
『日本書紀』本文よりも膨大な註にくすぐる学者のバトル
その昔坊主が上手に国巡り日本の骨組み描いた行基団
宗教と民俗学の境目で座敷わらしが又隠れんば
廃材の山は新たな木々の香を放ち樹靈を大気に還す

たまさかに読む『美味しんぼ』焼きそばがため友情のこはるるところ
過剰なるまでにコーラの害を説く教師をりに昭和の末期
音に聞く天の羽衣このやうなものかメロンのうへの生ハム
納豆のタレのパックのいくばくの進歩に技術立国しのばゆ
干からびし米ひとつは児の服の袖より出でぬ時空を超えて
第三のビール掲げてディオニュソス型の人らのつどへる路上
無回転寿司のにぎりは口中にかたちとどめず咽喉をくだりぬ
珈琲をすすりをはりて一刻に消えゆくぬくもりに包まるる

棄てられた神

月硝子

ないけど

堂那灼風

水盆の世界を生きる 海がありそこに成された地の人々は
まじばねえやべえいみじくはなはだし語彙力あてどなくさかのぼる
あけばのの屋根を万里をとび越えてさえぎるものない果ての海
その淵をのぞきこむならどこまでも光があきらめる深みまで
うつむいていいよ視線は下じやなく地球の中心を見ているよ
最果ての浜に読めない横文字のボトルが落ちている絵 ないけど
客席に収まるほどのみんなちみんな大好きパンジヤンドラム
僕たちの僕たちはって僕たちは誰だn年後の僕たちは

テーブルにパンのかけらが残つてる昨日もここで君と暮らした

◆

単純な暮らしを好む雨の降れば時計のねじを巻くだけの午後

◆

とりとめのない失望にも予兆にも生きてはいるねとあのひとはいう

◆

焦げ付いたグリルを磨き終わつたら料理の腕も上がる気がする

◆

年末は暮らしのチャンス和箪笥の防虫剤を取り替へて畳

◆

見える星だけで星座をつくること残りもの組み合わせてごはん

◆

寝る 起きる 食べる 働く 食べる 寝る

◆

予報では晴れらしいけど仕事だし物干竿だけの日向ぼこ

◆

ドラマにはならない程度に丁寧に暮らしてゆけば美しい日々

◆

できることだけして暮す人の手の届くところに全て揃へる

◆

餓鬼ですら丁寧な暮らしするというだけ私はズボラな暮らし

◆

めいっぱいひらいたせいで手のひらの隙間を抜けるふたりの暮らし

◆

北の地に暮らすことのみ知る人のアカウント消ゆ雪のごとくに

◆

手の荒れる水仕事には15%オフクーポンは使えませんか

◆ 佐藤水魚

「暮らし」

テーマ詠



マグカップ二つ並べて僕たちが暮らしになるまでお茶にしようか

別々の週末となりあのひとはどうしているの、とカレンダーが

鏡にも意地張りたくてへこませた腹に自分を騙し朝風呂へ

穏やかな日々を目指して生きるため大きなことを諦めていく

握らずにいる手のあわいに子が入りてビルの谷間に吹く春の風

きみらしくていいんだけれどパンの耳ついたまんまの胡瓜のサンド

ていねいなくらしつて何?ふかふかのホットケーキが何枚焼ける?

今日までにあつた出来事の全部が少しだけつき出した唇

「レターパックで現金送れは詐欺」という神託オラクル詩集の届きし朝に

右腕の子の左腕のぬくもりと上の空にいて、耳朶を引かれる

暮らしにはビールが必要雪が溶ける速さを思ひ善哉食べる

空席をながめていれば吸う息の味が薄くてテレビをつける

カレンダー掛け替えるたび壁面に画鋲の穴が増えにくく暮らし

玉ねぎがたくさん届くAmazonの人は「Amazon ドース」と甘い声で

◆ 宇祖田都子

◆ 石川順一

◆ 池田竜男

◆ 歩歩

◆ 雨虎俊寛

◆ 有村桔梗

◆ 麻倉ゆえ

◆ 青藤木葉

◆ あき子

くろわさん、いよいよの冬

ともえ夕夏

淀

西淳子

囊ふる
数字しか見ぬ大人らを黙らせるには数字しかない
クリスマスケーキをきちんと切る横で相似条件唱へてをりぬ
髪を切れば心の向きもかはるらし尾翼のやうな衿あしに風
受験料振り込む窓口のひとの眼鏡はとてもお洒落なかたち
するすると問題文を読むやうに海老の入つた茶碗蒸し食む
銀色のシャープペンシル窓からの日差しを跳ねかへすたくましさ
しづやかな部屋に加湿器は白く息はきつづけ過去問の旅
ともだちの選ばなかつた高校を受けるしつかり立つ子になつて

チエーホフの鈴

中村成志

耳に入れない

西村曜

またひとつ名に寂しさを纏わせて霜月ここに鈍色の朝
イーストの匂いは森の深さにて明日はパンとなる象牙色
風を受け高鳴る鈴かサハリンへ向かうチエーホフ、その橇の馬
陽が射せばほの見えてくる道のりの「次」と「今度」の使用残数
背負うのも悪くないんじゃない?真後ろへするり置かれた結びハンカチ
水の惑星土の惑星木の惑星鉄の惑星より生える瓜
呼吸器が息の流れを感じとるほど寒気に咲いた山茶花
さあさあもうおうちへ行こう地べたなど氷のようにつめたからうに

もうここは晩年だった焦げついた鍋から甘いバターのにおい
人並みでなくとも僕なりに浮かれてばらとケーキを買って帰った
花の名はばらしか知らない僕のためばらしか置いていない花屋を
でもきみが教えてくれた花の名をひとつ携え晩年をいく
サルビアが干からびている サルビアって干からぶるん?と笑う 冬晴れ
性愛の苦さを何に喻えようたとえばモカにあるいは虹に
生きていることはほんとはたのしくてコーヒー豆を耳に入れないと

雪の宴

ネコノカナ工

あなたの右手（うたの日十一・十二月まとめ）

薄荷。

雪道をごとくごとくとバスがゆく何か喻えているのね、きみも
雪道のゆはごとごととそれはもう目まぐるしくてバス酔いしちゃう
酔わすなら氷の盃一杯の冬の光を分けてくれぬか
つうるりと雪を注ぎ注がれた雪がひかり乾杯ですね

靴底についてきたんだあちこちのバス停からの雪たち雪たち
あちこちのバス停からの雪がもう打ち解けあってひかつていてるね
軒先の氷柱は五徳のごとくあり雪雲餅を焼いてくれます
雪道をごとくごとくとバスがゆくきみらも歌を詠み合っている

この街は酸素がすこし足りなくてあなたの名前がうまく呼べない
日曜のふたりベッドで微睡めば離れ小島のような朝九時

ため息でわたしの頬をくすぐってごめんと笑う君のくちびる
繋がれただけでは少し寂しくてあなたの左の小指に噛みつく
体温をゆびの先から分けあって氷点下の日は少しづいたく
ほんの少し昨日より爪が伸びていて昨日より少しきみは優しい
メリーゴーランドきらきら眩しくて閉じ込められたい冬の遊園地

アングスト

野歌りん

今晚はあなた帰つてくるかしら 私をひとりにする気なのかも
聞いたことない息遣いが聞こえてる 誰かがそこで私を見てる
衝動が抑えきれない このままじゃいつか傷つけてしまいそうだ
暗闇に閉じ込められるあの時間のちに折檻だつたと知つた
無差別は実は差別をしているし色眼鏡なら皆かけてる
蹲りどんな痛みに耐えてでも夢の中ではファンタジースタだ
手袋はなんだつて隠してくれる 不安も期待も血の跡さえも
残酷な殺人鬼の映画を観てる 作り話のままでいてくれ

反古空間

濱松哲朗

なめらかに会議了んぬ この委員真四角のふき出しもて語るゆゑ
もう黙つて見てをれば良かりしを不意に泉へ浸したくなる
ソーセージ一袋火にあぶるとき王とはろくでなしのみせしめ
奔る火をおのれのごとく眺めゐる危ふさに過去も未来もあらず
歩道へと達み入りつつバス停の土地あり 一邊は人と接して
みづからを亡靈のごとく連れ出してひなたにひとつ影ある不思議
空間は視野の侵略、うすあをきねむりを反古のうへにのばして
加湿器にふきあぐる息惑ひつつくだりつつやがて消えてしまへり

待ち針

ゆりこ

白

渡邊知博

二十歳過ぎリ力ちゃん人形欲しがった子は新しいミシンも買った
リカちゃんを脱がせるパンツは穿いているブラを着けてよ五年生でも
胸板が結構厚い でもリアルではない胸に配慮を感じて
オリジナル型紙をひく子は皆と同じを避けるアーティストゆえ
縫い上げたワンピースには百均のレースを重ね重ねて重ねる
失敗をした子へ語る「また縫えばいいよ、時間はたっぷりとある」
私も縫うコートに付けた十字架に刺された気がしたクリスマスイブ
かわいいと互いに褒める残された二人の時間はそんなにはない

まあくらいいんしいんゆきゆきゆきいーんしーんゆきゆ・・こおり
起き抜けに公園に行くしんせつを食べていっぱいいっぽいらしい
噴水はすっかり涸られ積雪の重さに耐えて立たされている
火事のごと怒鳴られている幼子の目に光源として水滴
私は視点、客席に磔にされた眼球としての生
まつしろなしずかなせかいに赤々といろづけられていくてるよゆき
目の前でただ起きてる出来事に雪がちらつくゆきがちらつく
ひつじ雲買いている光線よ罪ふかきひとを照らし出して

ザ・ニューワールド

龍翔

- 19 -

新しき世界に入りぬ 『ザ・ニューワールド』といふ名の居酒屋ありて
ささやかな乾杯をせり あたたかな出汁の注がれたちひさき杯で
最近はどう、と互ひに問ひ合へばポテトサラダのほのかに甘し
お目当てのポテトフライはほくほくと銀のボウルに盛られてをりぬ
凍結の話聞きつつ摘みたる茗荷とカリフラワーのピクルス
おぼきめの皿が欲しいと次々に小皿並べてきみは言ひたり
手羽先の肉と骨とを引き剥がし考へる遺産のつかひみち
メッセージ書かれてゐたり コップには『承認欲求強め、割と』と



- 14 -

何もかもバカらしくなる夜がありコンビニエンスストアは灯る

昨日より少しこちらを向く月にあらん限りの願い事する

十二歳 海に落とした飴玉を頬張るように前を見ていた

十五歳 星月夜には脱け出して牛丼食べるのが趣味だった

流星のかすめる音のして僕は受け取ったのだあなたの言葉

真夜中に降つてた気がした雨の隠したもののは何だつたらう

まつさらな朝が僕らのために来る夜にしていいキャンバスとして

東京で風の在処を探るうちあなたといつか夫婦になった

冬の街はきうめいて

悠佳里

街中がイルミネーションで輝いてマスクしても笑顔とわかる

知らぬ間に戻る日常人混みに流されてゆくベビーカーと私

子を連れてジーパンで歩くこんなにもさみしい気持ちになるはどうして?

世の中は私がいなくとも回る 家の周りをくるくる回る

子育てと家事に追われる毎日とこんなに近くてこんなに遠い

コロナ禍でなければ違つていたのかな大人に会わずに過ぎる毎日

化粧してスカートはいて出かけたい 今日も夫は帰りが遅い

確かめるように何度も囁いた 君はかわいい 君はかわいい

夢の狭間

ゆやゆき

突然の大雪犬と外出れば散歩を拒みわれを見上げる

雪かきを終えたそばから積もつて凍るつま先汗ばむ背中

うんざりとするほど積もり匙投げる獣道めくゴミステーション

長靴の上まで埋まり長靴の役目果たさず長靴濡れる

遠近感さえも失いよろめいて新雪の中人型作る

雪を踏む音だけ響く帰り道吹雪いても日暮れは青い

雪煙舞い上げながらダイブする犬の体は雪に溺れる

除雪車は夢の狭間で動き出すねむらないひと月は見ている

転人生、四十物さやか

ヒプノ寿司マイク

メビウス

福山桃歌

リコピンと呼ばれたいのよそろそろね苗字にさん付けから進みたい
ユッキーと呼ばれ嬉しい 男子にもおなじ名前の子がいるからね
何回も聞かれ慣れてる読み方を初見の女子が「あいもの」と笑む
コジーって呼ばれてるのに本当の苗字は小島でないことを知る
キムタツと呼ばれる方とただ木村とだけ呼ばれるふたりがいてさ
馬場ちゃんはパパが床屋で他の子よりなぜだか顔が輝いている
クラスでは誰も知らない二つ名を持って周りと違うオレだが
まりつかと僕だけ呼べず校門を出たらまりつべ、まりつべ、そつと。

吹雪

廣珍堂

アッサラームなぼくたち

まさけ

この部屋の朝の終わりに怯えてるあなたが世界になつた夜から
星だったあなたに触れるしあわせは青いひかりに溶けて流れる
くちびるに知らない名前の花が咲くいはずあなたに摘まれるはずの
美しいことばしか知らないからだ冷たい息に喉が詰まつて
永遠を描いた赤い約束を解いて垂らす闇の底まで
何度も呼吸は止まる落ちてくるあなたの涙が頬に沁むたび
あたたかいかけらを拾うこなごなになつたのは何だつたんだろう
この恋はあなたに殺してほしいからやさしい両手でどどめをさして

下校路は一面吹雪のなかにあり後輩庇ひ駅を目指しぬ
国道にテールランプの並びたる吹雪の夜のコンビニ眩し
笑ひつつ裸足で吹雪の校庭を一周といふ罰ゲームありき
今朝のバス吹雪のなかで待つひとのコートの肩はすでに真白に
熟練のエンジンブレーキ操りたるボンネットバスの運転手ぬき
幻想のなかへと吹雪入り来て鏡花の家の前にあやかし
吹雪だし今夜はここに泊まるわと酔つてゐるだけの妹を蹴る
昨晩の吹雪は間^{あは}通り抜け窓台白き晴れの朝なり

ちつぽけな虚勢を張つて日々生きるベビーサタンにぼくをみている
大人にもほしい呪文は少しありベホマにルーラそれとメガンテ
この世界半分やると言わされたらおそらく僕ははいを押して
お客様をバーサーカーのように狩る営業二課の武闘派田中
大仰なアッサラームの商人のように上司にへつらう山田
「あなたわたしにくびつれといいますか?」言わないけれど思つたりした
水面に映る世界が眩しくて旅の扉とみ見紛うている
戦場のようなこの世を生きるためにドラゴンクエストマーチで進む

終電をわざと逃したあの頃は駆け引きさえも楽しんでいた
改札を抜ける音だけ寂しげに聞こえてくる午前5時半

「わたしです」寂しい夜にダイヤルをまわす一人で貴方に向けて

毒薬は口移しして呑ませてよ来世も共に過ごしたいから

夜明けまで愛し合つても虚しくて重ねる度に薄っぺらくなる

真夜中のシーツを越えて体温が私より高い君に触れたい

触れたくて齧つて撫でて微笑んで君を食べたい、そういう意味で

背伸びしたわたしにはまだ早すぎてガラスの靴は今日も似合わず

まるばうろ 世界に隅があるとしてルンバはたどり着けるだろうか
降りそうで降らなかつたな曇天の夜は朝方より明るいな
じまなるおおつごもりのテレビではマツケンさんがきらきら踊る
ほそーくながーく生きたいですかーのびきつた蕎麦はぶつぶつ切れて 鐘の音
あけましておめでとう！さつきといまの境目を行つたり来たりして
ちやくちやくと西の暦はふりつもりふりつもりして二〇二二
お年玉もらえる歳じやなくなつてだからこそ楽しい楽しいね
ふうくれえ 世界に罪があることを忘れてしまいたいよブラーべ

うしかうとうへ（隠れているよ）

深影コトハ

うしなつて初めて氣づく熱だつた予報になかつた初雪が降る
どうしたら正解だつたか分からず連絡先を一つずつ消す
喰らうしかなかつた毒が黒髪をますます黒く染めてゆく冬
わたばうしの奥で静かに咲く紅に触れないようによいねを押した
見つめ合はしあわせを信じ込まされている人たちの通知は切つた
いいんだようしろの正面誰だつて敵になるなら斬り払うだけ
決めたのにどうしても捨てられなくてバンザイさせてゆくぬいぐるみ
とらえたと思ったらまた逃げてゆく心の晴れ間を明日に願う

持つことを選んで歩く

虫武一俊

満月

六廻めれう

草笛を吹きたくなるほど伸びきつたこれを刈りきるまでの夕映え
無関係ではなくダンスに必要な段差以外は均されていけ
眠れずに見る天井のざらざらのまま顔面に落ちてきそうな
雨に息 最中をふたつに割るときにあんこがねねつとして離れゆく
すべてわかつたつもりの笑いがこみ上げる冬の三角州に立たされて
持つことを選んで歩く道に咲く青白い冬の光の花よ
雨桶を溢れる雨の暴力の極めて規則的な間隔
あこがれた氷の城の崩されてその池を吹く風のきさらぎ

CMに想う

六浦筆の助

向日葵と向日葵の油絵

村田一広

「従業員百人載つても大丈夫！」アベノマスクを詰めた物置
「思うほど悪くないよ」と吾の人生慰めているビールCM
夢ひらく「きのこ」「たけのこ」「明治チョコ」、歌はテレビの底に沈んで
浴衣着て竜宮城に行く夢はこれだったのか伊東のハトヤ
「天国と地獄」のリズムで仕事してふと口に出る「カステラ一番」
白銀の大地と家族のぬくもりが長年溶ける「ハウスのシチューム」
帰省せず暮れもこもれる人々にAmazonの箱歌う「ふるさと」
平和つて赤・青・黄色の灯がともり色んなCM流れてること

パンもない寂れたスーパーなんだけど、ばあさんが出す総菜はいい
裏路地を真顔で進みゆく君はもうずいぶんと迷ってきたのか

酔い醒めぬうちに歓楽街に着く蟻地獄的界隈に住む
谷底へだらだらと人を運んでるかわいい名前の小さな列車

穏やかでとてもいい街だったよね、君が越したら用はないけど。
雨の昼あるいは夜の思い出に憑りつかれている我が雑司ヶ谷

誰かの前座

深山睦美

しきたえの腕に凭れし我が心掴めず虚しいあなたのまくら
店の奥 車道の反対 あなたには自分で決めた上座があつた
割り勘を一枚二枚と数え出す 六枚くらいで逃げ出す私
記念日と同じ並びの時計見て今何時かと無意識に問う
同じ手で愛し傷つけ飯も食うすごいセンスをお持ちのようで
誕生日ケーキのロウソク吹き消して暗闇に浮く死神の顔
杯中の蛇影 蟒蛇うわばみと信じて、呻あおる 現実になるといけない
いいサゲが思いつかない私たちに ここらで一粒、涙ほしが怖い

お前では話にならんということを説明下手の人は言うなり
二年前忘年会をした店を地図で探せば閉業の文字
山手線つぎに京浜東北線 二頭の犬がともに駆け出す
ホームドア設置されれば挟まれる確率もまた二倍に増える
年寄りが優先席に座るよう送り続ける念が効かない
よもすがら歩哨となりて佇つとき歌のこころはぐつと遠のく
満月と信じて仰ぎ見たものが下水の蓋の穴と気づいて
新都心高さを誇るようにして赤いランプはぼうと燃えたり

うしかうとうへ（隠れているよ）

深影コトハ

誰かの前座

深山睦美

行きつけは神社、古民家カフェ、雲園。半透明の隣人もそう。
パンもない寂れたスーパーなんだけど、ばあさんが出す総菜はいい
裏路地を真顔で進みゆく君はもうずいぶんと迷ってきたのか
酔い醒めぬうちに歓楽街に着く蟻地獄的界隈に住む
谷底へだらだらと人を運んでるかわいい名前の小さな列車
穏やかでとてもいい街だったよね、君が越したら用はないけど。
雨の昼あるいは夜の思い出に憑りつかれている我が雑司ヶ谷